

望ましい英語授業と 楽しさの要因の関係

—英語授業学研究的視点からのアプローチ—

大学英語教育学会（JACET）関東支部第7回大会
2013年6月16日 青山学院大学（青山キャンパス）

鈴木政浩（西武文理大学）

本日用意した資料

パワーポイントノート(本資料)

- 資料1 望ましい英語授業と楽しさの要因に関する質問紙
- 資料2 探索的因子分析パターン行列
- 資料3 確証的因子分析のモデル、改定後のモデル
- 資料4 望ましい英語授業の枠組と参加表現の楽しさ要因の関係
(望ましい英語授業と参加表現の楽しさ要因からなる枠組)

英語授業学研究

「英語授業学」関連研究の経緯 鈴木(2011:54)より

年	著作等
1983年	若林(1983:186-187)
1984年	若林他共編(1984)
1990年	若林俊輔教授還暦記念論文集編集委員会編(1990) 「第2言語習得理論ではなく徹底して現場的なものを」
1991年	松畑(1991)「名人芸の一般化」
2001年	『「英語教育の推進について」の検討素案』(2001)
2004年	「田辺メモ: 大学英語教育の在り方を考える」(報告) 大学英語教育学会授業学研究委員会発足
2007年	大学英語教育学会授業学研究委員会編著(2007)
2010年	大学英語教育学会第二次授業学研究委員会発足 山岸・高橋・鈴木編著(2010)



本研究の定義

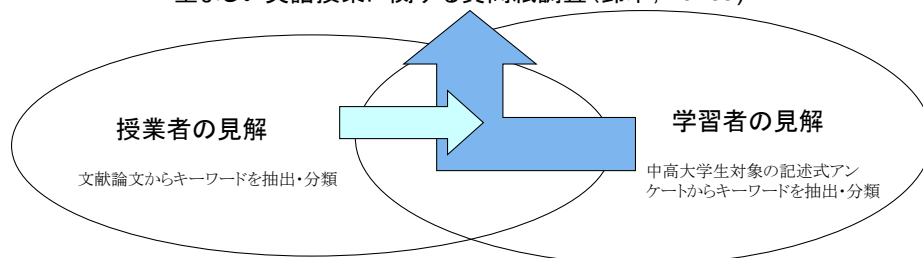
望ましい英語授業の枠組み、その枠組みに含まれる項目とその関係を明らかにする研究

英語授業学という用語が著書等で使われ始めたのは80年代前半から。当時は校内暴力の嵐が吹き荒れ、海外から移入された第2言語習得理論は現場では役に立たないという見方があった。これに対して現場の知恵を集め体系化するための試みとして英語授業学が提唱された。そのためこの時期の英語授業学研究では中高の実践を分析対象としたものが多かった。90年代に入ると英語授業学関連の著作も増えた。その中で英語授業学を著書のタイトルにしたのが松畑(1991)であった。英語授業学の枠組を提起し、「名人芸の一般化」をその使命とした。大学で英語授業実践が着目されたのは2000年に入ってからで、大学英語教育学会授業学研究委員会編著(2007)は大学における授業実践事例を集録した著作としてまとまった形で公刊されたのは初めてと言ってもよいかもしれない。

英語嫌いや苦手意識の強い学習者が相変わらず多い中、名人芸の一般化も大切かもしれない。それ以上に大切なのは、どの先生でも一定程度以上の授業づくりができるようになる指針が必要であろう。しかも1回ごとの授業で完結することなく、短期・中期・長期の見通しを持てる授業づくりの指針があるにこしたことはない。その際授業者の考えだけでなく、学習者が望ましいと考える授業の枠組を提起することで、英語嫌いや苦手意識の克服ができるようになるかもしれない。こうした問題意識から、本研究では望ましい英語授業の枠組、その枠組みに含まれる項目とその関係を明らかにする研究と位置付ける。

望ましい英語授業の枠組と項目

望ましい英語授業に関する質問紙調査(鈴木, 2013a)

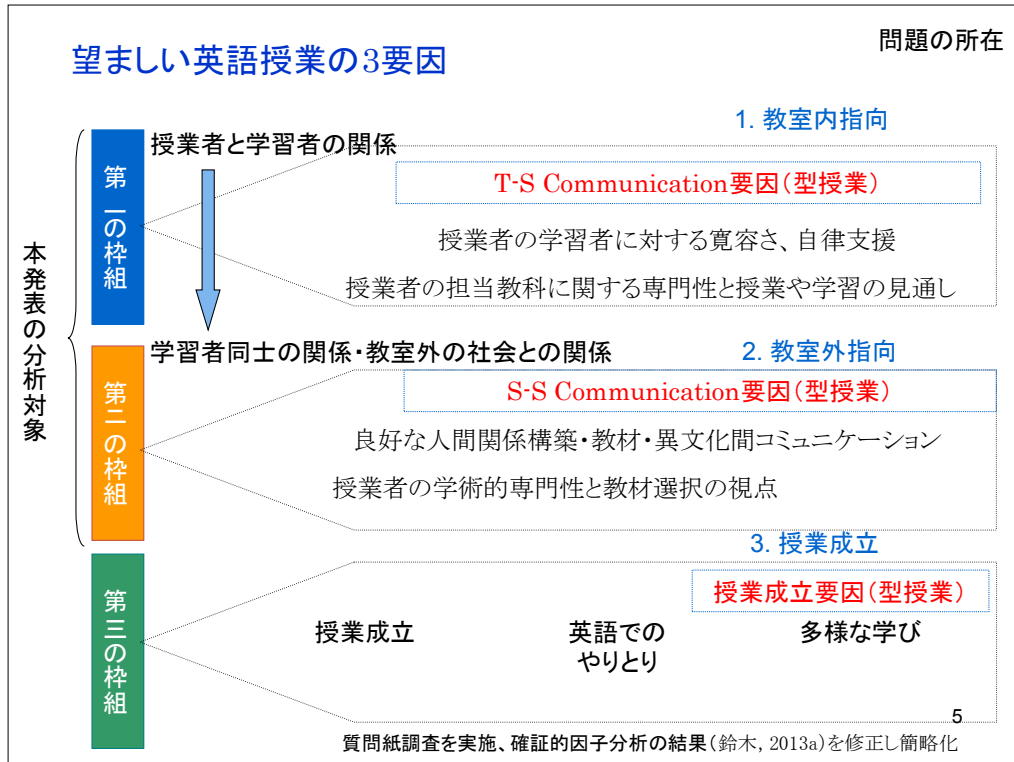


この授業はここがすぐれている

望ましい英語授業はこういう要因をふまえている

誰もが一定水準の英語授業を構築できる指針づくり

日本では戦前から授業研究という取り組みが盛んであった。授業研究は教材研究や指導案を作成。授業を公開し、参加者で授業内容を分析し次の授業実践に活かすというサイクルを繰り返すものであった。こうした努力が戦後日本の教育を支えたことは否定できないし、近年海外でも授業研究(Lesson Study)は評価されるようになってきた。しかし、授業研究で蓄積した知恵はなかなか広く共有されることが少ないように思われる。特に新任の先生がある程度の質の授業に取り組むといった場合、どのような点に注意すればよいのかがわからない。毎時間の授業を自転車操業で進めることが多くなる。つまり、「この授業はここがすぐれている」という分析に加え、どのような点を踏まえれば一定水準の授業ができるようになるのかという指針が必要であると思われる。特に生徒学生の視点を取り入れた授業づくりの指針があれば、英語嫌いや苦手意識の強い生徒学生を引き付けることができるのではないかと考えた。生徒学生の視点からみた望ましい英語授業の要因を探る必要があるということになる。



質問紙調査のデータを因子分析にかけたところ、望ましい英語授業には3つの要因があることがわかった。第1の要因は T-S Communication 要因であり、主として授業内指向の項目から構成されている。内容としては授業者の教科に関する専門性、授業や学習の見通し、学習者に対する寛容さや自律支援を重視したものとなっている (T-S Communication 型英語授業)。第2の要因は S-S Communication 要因であり、主として授業内の取組に加え授業外に目を向ける項目から構成されている。内容としては、教室内での良好な人間関係の構築、社会問題などに関する教材、異文化間コミュニケーションや授業者の学術的専門性や教材選択の視点を重視したものとなっている。第3の要因は授業成立要因であり、授業成立に関わる規律、英語でのやりとりや多様な学びに関わる項目から構成されている (S-S Communication 型英語授業)。第3の要因はごく一般的にみられる授業の型であり、本研究の分析からは除外した。

楽しさの5要因

問題の所在

1. 参加表現の楽しさ

個人の発表がうまくいく
ペアで会話練習ができる
考える活動とグループの活動がある
英文の内容をわかってもらえる

グループの発表がうまくいく
考えを英語で表現できる

2. 言語文化的知識の楽しさ

英語を話す人との文化の違いがわかる
語源を教えてもらえる
教科書の国について詳しく勉強できる

3. 教科書外の楽しさ

映画の表現を知る
教科書以外の英語の本を読む
外国へ行った時の話をしてもらう
英語の新聞が読めるようになる

4. 熟達の楽しさ

文法文型の問題ができるようになる
長文の問題ができるようになる

5. 多様な学びの楽しさ

ビンゴを使って勉強する
コンピュータを使って勉強する

質問紙調査を実施、確証的因子分析の結果（鈴木, 2012）

6

同様に質問紙調査の結果、生徒学生の考える楽しさには5つの要因があることがわかっている。特徴的なのは、教科書外の内容を学びたいという要因が抽出されたことである。学習意欲の低下が問題とされる中、生徒学生はもっと幅広く学びたいと考えていることがわかる。また、参加表現の楽しさの内容についても着目する必要がある。参加表現と言えばペアワークやグループワークを思い浮かべるが、それ以外にも考える活動や書いた英文の内容がわかってもらえる、考えを表現できるなど、考えることや表現するという内容が含まれている。学習者は見た目の華やかさだけでなく、考えたり表現したりすることも求めていると考えることができる。この発表では、この参加表現の楽しさが研究の中心となる。

すぐれた英語授業と楽しさの関係

- **すぐれた英語授業の要因と楽しさは重なる部分が多い**(森住, 1980)

相反する見方

楽しい英語授業は
すぐれた英語授業ではない？

- **楽しさが学力形成につながっていない**
(齊藤, 2002; 鈴木, 2011)

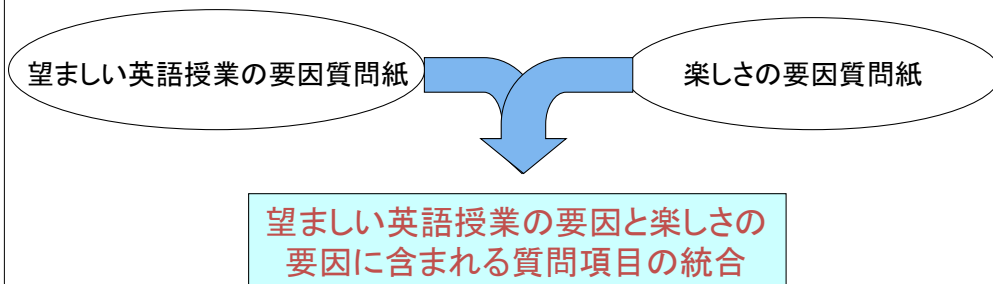
7

生徒学生を英語学習に向き合わせるには楽しい英語授業が必要であると考え授業実践を進めることが増えた。これは楽しい英語授業はすぐれた英語授業と重なる部分があるという見解に通じる。しかし、現在行われている授業の楽しさは、英語学力形成につながっていないという見解もある。確かに楽しい英語授業は増えたようにも見受けられるが、英語学力が伸びたという話はあまり聞かない。英語授業における楽しさと望ましい英語授業の要因は重なるのか、それとも別物なのか、もし別物であるとすれば望ましい英語授業とどのような関係にあるのか、こうした事柄について検証をする必要がある。

研究の目的

望ましい英語授業の要因に楽しさの要因は内包されるのか 別物なのか

望ましい英語授業の要因と楽しさの要因の関係を分析すること



質問紙は資料1

8

望ましい英語授業と楽しさの要因の関係を分析するために、過去に実施した望ましい英語授業の要因と楽しさの要因に関する質問紙調査の質問項目を1つにした。これを因子分析にかけることで、両者の関係が明らかになるのではないかと考えた。

方法と手続き

方法

- 1) 66項目からなる6件法の質問紙により調査を実施結果を**探索的因子分析**にかけ因子構造を推定。
- 2) モデルを作成し**確証的因子分析**により適合度を算出(SPSS ver. 11とAmos ver.17)。

対象者

関東近県の中高大学生1357名(中学生362名、高校生779名、大学生216名)。

調査期間

調査期間は2012年10月から12月。

質問紙は資料1を参照 9

探索的因子分析はSPSSで可能。多数の質問項目を共通性という点でグループ分けすることになる。しかし、因子分析では、標本誤差と言って、集めるサンプルによって結果が異なる場合がある。そこで、集めるサンプルによって違いが出るかどうかを確認するために、確証的因子分析を行う

Amosを使用することにより、因子分析の結果が、母集団や集めたサンプルにどの程度当てはまるのかを数値として出してくれる(GFI, AGFI)。サンプル数による誤差もあるため、サンプル数によらず、どの程度当てはまるのかも数値で算出してくれる(RMSEA)。これが適合度と言われるものである。

結果 5因子構造が妥当

探索的因子分析

- 1.T-S Communication要因 } 前回調査と同じ因子 →信頼性、要因の安定性
2.S-S Communication要因 } →意見が分かれにくい要因
3.参加表現の楽しさ要因 } 参加表現の楽しさ要因が最も安定

- 4.T-S・S-S混合要因 }
5.熟達・学習深化の楽しさ要因 } 不安定な要因
(5要因のうち言語文化的知識・教科書外・熟達の3要因)

別々の要因に分かれた

→ 学習者は**楽しさの要因**と**望ましい英語授業の要因**は別物と考えている可能性

確証的因子分析(モデル適合度)

GFI	AGFI	CFI	RMSEA
.780	.760	.871	.065

パターン行列と各因子に含まれる項目は資料2 モデルは資料3

10

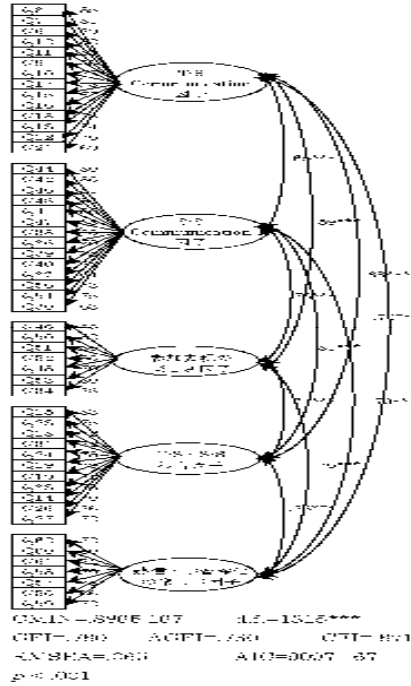
GFI, AGFI, CFIは.90以上で良好(ただし、GFI > AGFI)。RMSEAは.05以下で良好、.10より小さければ許容範囲。ただし、自由度が多いモデル(変数、つまり質問項目などの数)はGFI, AGFIが下がる傾向にあるため許容範囲内とみなす。適合度が良好でないことでモデルがだめだと考えるのではなく、モデルをどう解釈するのかで、研究の方向性を探るということになる。

探索的因子分析の結果、望ましい英語授業に関する質問紙調査、楽しさの要因に関する質問紙調査と同じ要因が抽出された(T-S Communication要因、S-S Communication要因、参加表現の楽しさ要因)。また、過去の調査とは異なる要因に含まれた項目も存在した。

結果的には、楽しさに関する質問項目は望ましい英語授業の要因に含まれることはなかった。学習者は楽しさの要因と望ましい英語授業の要因を別物と考えている可能性が高いことがわかった。さらに、楽しさの要因に含まれる質問項目のうち、参加表現の楽しさ要因には前回とまったく同じ質問項目が含まれた。このことは楽しさの要因のうち、参加表現の楽しさがもっとも安定しており、意見が分かれにくい要因である可能性を示唆した。望ましい英語授業に関する質問項目に関しては、前回と同様の因子に含まれたものとそうでないものがあった。つまり、望ましい英語授業要因に含まれる質問項目の中には、学習者により意見が分かれるものも含まれている可能性があることがわかった。

共分散構造分析によるモデル

資料 8 第二的因子分析のモデル



11

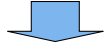
これがAmosで描いたモデル。四角で描かれているのは観測変数(アンケートの質問項目の数値)、楕円で描かれているのは潜在変数(観測変数の共通性を数値で示したもの)。潜在変数に含まれる質問項目を見渡して、楕円の部分の変数の名前を決める。これが因子(要因)と呼ばれるものである。このモデルの適合度は良好とは言えず許容範囲であることから、モデルの改良を行う。モデルの改良の方法には、パス係数の低いものを除去するなどの方法がある。今回の調査と前回の調査を比較して、不安定な要因が存在したことから、これらを除去したモデルを作成し適合度を確認する。

モデルの改良

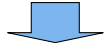
考察

今回調査で他の因子に統合された項目

T-S・S-S混合因子・熟達学習深化の楽しさ因子



標本誤差、モデルを不安定にしている原因の可能性



除外し再度確認的因子分析

適合度はRMSEA以外向上

	GFI	AGFI	CFI	RMSEA	AIC
最初のモデル	.780	.760	.871	.065	9097.167
改良後	.833	.811	.903	.070	4375.930

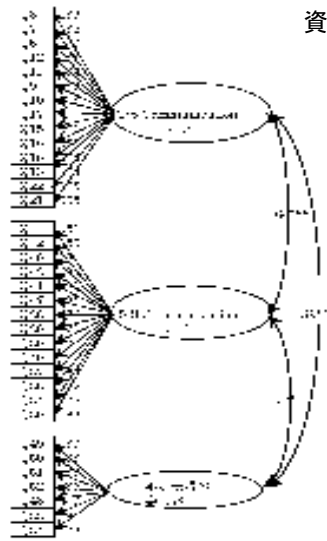
12

改良後のモデル(資料3)

確認的因子分析の結果が良好でない場合、モデルの改良を行う。今回1回目と2回目の質問紙調査で異なる因子に含まれた質問項目と因子は、モデルを不安定にしていると考え、モデルから削除した。その結果適合度は良好に近づいた。ただし自由度が減ると適合度が上がる傾向にあるため、これはある意味当然の結果であるともいえる。また、要因をできるだけ少なくすることで、質問紙調査の結果をより深く掘り下げることが可能になる。

共分散構造分析による改良モデル

資料3



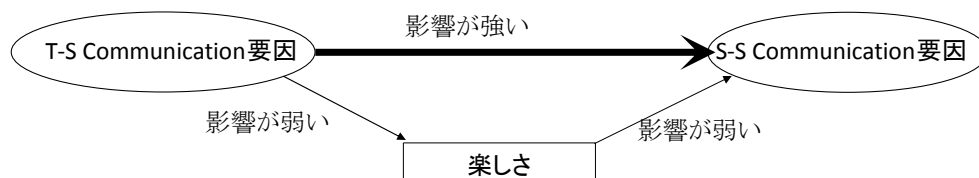
RMSEA = 0.088896 CFI = 0.977774
GFI = 0.990000 AIC = 51.1 BIC = 50.0
NFI = 0.990000 NNFI = 0.977774
TLI = 0.990000

13

参加表現の楽しさ要因は2回の調査で同じ要因に含まれた。因子分析は集めるデータによって結果が異なることがある。これは標本誤差と呼ばれる。

望ましい英語授業の2要因と楽しさの関係

鈴木(2013b)



楽しさ: 授業に対する漠然とした印象

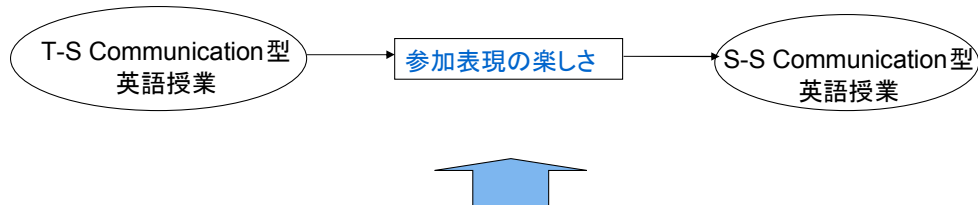
英語の授業は楽しいと 思う 6・5・4・3・2・1 思わない

現在学習者が受けている授業の楽しさは
S-S Communication型授業に発展していない可能性

14

T-S Communication 要因と S-S Communication 要因を変数にした共分散構造分析の結果、前者は後者に強い影響を与えていたようであった。このことは、T-S Communication 型英語授業を重視すれば、S-S Communication 型英語授業にスムーズに移行する可能性を示唆した。また、別の調査結果から(鈴木, 2012)は、T-S Communication 型英語授業よりも S-S Communication 型英語授業の方が、楽しさとの関係が若干ではあるが密接であるということがわかっている。望ましい英語授業の要因に関する質問紙には、『英語の授業は楽しい』という項目が含まれていた。6件法(6・5・4・3・2・1の6段階)で回答するものであり、現在受けている(もしくは過去に受けてきた)英語授業に対する漠然とした印象を問う項目であったことから、T-S Communication 型英語授業が S-S Communication 型英語授業に移行する際、楽しさは両者を媒介する役割を果たしているのではないかと予測した。しかし、楽しさを変数にしたモデルのパス係数を見る限り、T-S Communication から楽しさの影響は強いとは言えず、また楽しさから S-S Communication 型英語授業への影響はさらに強くないことがわかった。つまり、現在行われている英語授業の楽しさは、楽しさだけが独立していて、望ましい英語授業の要因との可能性関係があまり密接ではないことがわかっている。これは、前述の斉藤(2002)や鈴木(2011)が指摘する通り、楽しさが英語学力形成につながっていないという見方と一致するとも考えられる。

参加表現の楽しさ要因の役割



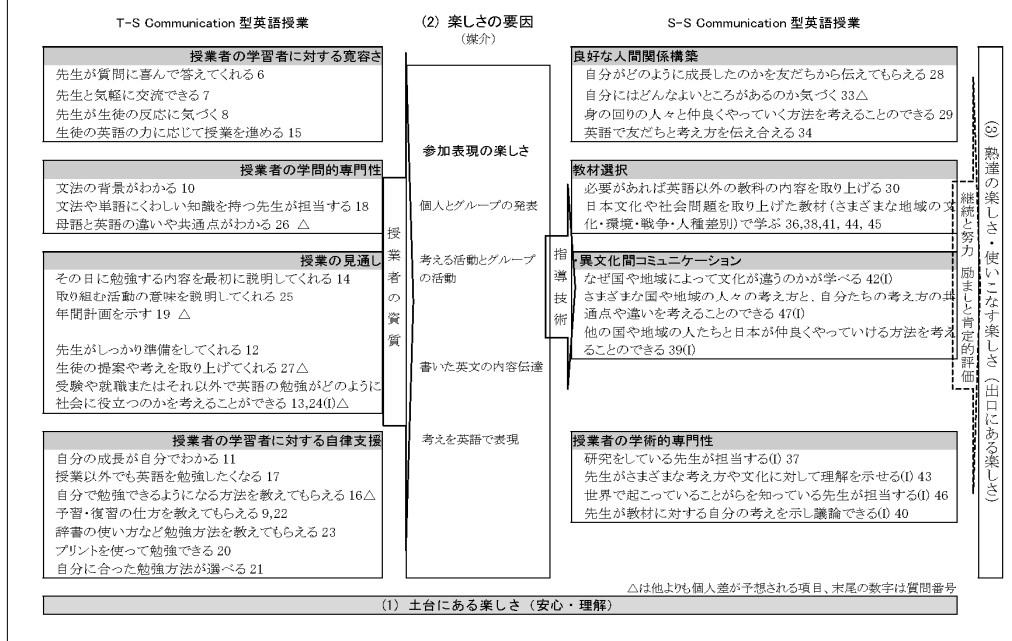
有効な橋渡しとなる可能性を示唆

楽しさと望ましい英語授業の要因とさほど関係がなかったが、生徒学生が考える楽しさの要因は、もしかすると望ましい英語授業の要因と関係があり、両者を媒介する役割を果たしていることが考えられる。本研究のもっとも大きな課題は、望ましい英語授業の要因ともっとも安定していると考えさ
んしゅつ加表現の楽しさ要因との関係を検証することであろう。T-S Communication型英語授業と
S-S Communication型英語授業の間に参加表現の楽しさ要因をはさんだモデルの適合度を検証
し、実際に参加表現の楽しさ要因が望ましい英語授業の要因の橋渡しとなっているのかを分析し
たい。

英語授業学研究における望ましい英語授業の枠組
 —参加表現の楽しさ要因をふまえた提案—

資料4

資料4 望ましい英語授業の枠組と参加表現の楽しさ要因の関係



もし参加表現の楽しさ要因がT-S Communication型英語授業とS-S Communication型英語授業の橋渡しとなっているのであれば、共分散構造分析のモデルからこのような枠組みが想定できる。質問項目は便宜的に分類してみた。分類した質問項目で信頼性係数を算出する必要があるが、これは次の発表にゆずる。また、この枠組でから想定されるモデルに関しても適合度を算出することが必要となる。これらの課題については、今夏順次発表していく予定である。(関東甲信越英語教育学会、日本リメディアル教育学会)。

本研究の課題

1. 今回提案したモデルの適合度検証

2. 枠組にもとづく授業実践事例の提案

T-S Communication型英語授業

→参加表現の楽しさ要因

→S-S Communication型英語授業

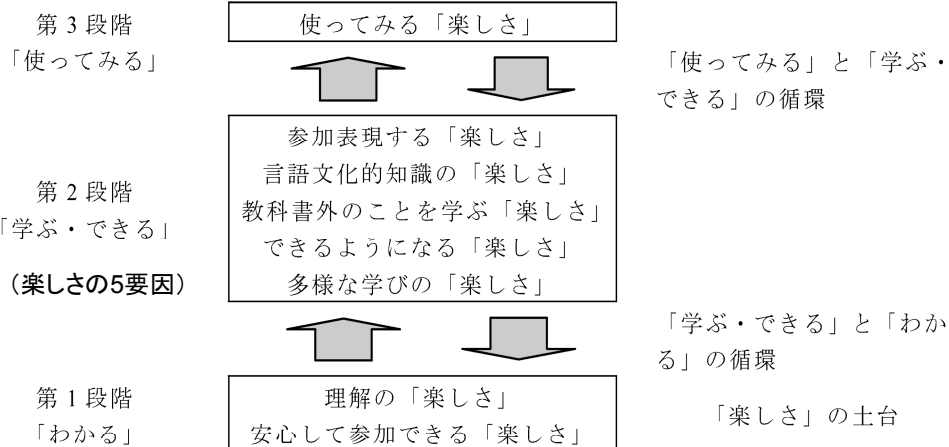
17

本研究の課題の第1は、T-S Communication型英語授業がS-S Communication型英語授業に移行する、その際参加表現の楽しさ要因が橋渡しとなる今回のモデルの適合度を検証することである。適合度が許容範囲内以上であれば、モデルの解釈と参加表現の楽しさ要因を踏まえた望ましい英語授業の枠組にもとづき、具体的な実践事例の提案をすることになる。特に、T-S Communication型英語授業を参加表現の楽しさにつなげる授業実践例、参加表現の楽しさ要因をS-S Communication型英語授業へとつなげる授業実践例の提案が必要となろう。また、授業案を作成する際、それぞれの要因に含まれる項目をどのようにリンクさせるのかを提案することも有意義であろう。

参考文献

- 大学英語教育学会授業学研究委員会編著(2007)『高等教育における英語授業の研究－授業実践事例を中心に』東京:松柏社
- 松畑熙一(1991)『英語授業学の展開』東京:大修館書店
- 森住衛(1980)「楽しい授業とは何か」『英語教育』29(1), 56-57 大修館書店
- 齋藤栄二(2002)「楽しければそれでいいのか」『語研ジャーナル』(3), 93-96.
- 鈴木政浩(2011)「英語授業の『楽しさ』を構成する要因とその相互作用に関する研究－英語授業学研究からのアプローチ」『第37回全国英語教育学会山形研究大会発表予稿集』104-105
- 鈴木政浩(2012)。「英語授業における『楽しさ』の要因に関する研究 A Study on Factors of Enjoyment of Learning English in Classroom.」*KATE Bulletin*, 26, 1-14.
- 鈴木政浩(2013a)。「望ましい英語授業の要因」『言語教育研究』第3号, 85-95 桜美林大学大学院言語教育研究科.
- 鈴木政浩(2013b)「望ましい英語授業の2要因の関係－楽しさの影響をふまえた分析－」『言語文化教育研究』第3号 東京言語文化教育研究会
- 鈴木政浩・三沢渉(2013)「望ましい英語授業と楽しさの関係」*KATE Bulletin*, 27, 43-55.
- 若林俊輔(1983)『これからの英語教師－英語授業学的アプローチによる30章』東京:大修館書店
- 若林俊輔教授還暦記念論文集編集委員会編(1991)『英語授業学の視点 若林俊輔教授還暦記念論文集』東京:三省堂
- 若林俊輔・森永誠・青木庸效 共編(1984)『英語授業学 [指導技術論]』東京:三省堂
- 山岸信義・高橋貞雄・鈴木政浩編(2010)『英語授業デザイン 学習空間づくりの教授法と実践』大学英語教育学会監修 英語教育学大系第11巻東京:大修館書店

楽しさの要因と構造



鈴木(2012)